

## 歯科医療・口腔保健の2050年までの研究課題

竹内 研時<sup>1)</sup>, 深井 穂博<sup>2)</sup>

### Oral health research towards 2050

— A summary of a workshop at the 15<sup>th</sup> colloquium of Fukai Institute of Health Science —

Kenji Takeuchi<sup>1)</sup>, Kakuhiko Fukai<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野, <sup>2)</sup> 深井保健科学研究所

キーワード：歯科医院、歯学部、需要、高齢化、他職種連携、健康格差

#### 要 旨

2050年の歯科医療・口腔保健を予測する上で、長期的なビジョンに立った研究課題を立案し、科学的根拠を蓄積していくことは極めて重要である。そこでわれわれは深井保健科学研究所第15回コロキウム(2016年8月20日、東京国際フォーラム)において、「2050年までの研究課題」という題目でワークショップを開催した。様々な業種・職種の参加者を交え、(1) 歯科医院の在り方の変化、(2) 歯学部の在り方の変化、といった将来予測を中心に議論が行われ、様々な研究課題が提案された。今後、現代版バームス予測と言える2050年の歯科医療・口腔保健の在り方を考えまとめていくためには、本ワークショップより明らかとなった研究課題を意識した取り組みを参加者がそれぞれの分野で実践し、さらなる議論を重ねていくことが必要である。

#### はじめに

われわれは深井保健科学研究所第15回コロキウム(2016年8月20日(土)11~17時、東京国際フォーラム、ガラスホール棟G510)において、「2050年までの研究課題」という題目でワークショップを開催し、約50名の参加者とともに討論

を行った。本ワークショップは、1990年代に当時のWHO歯科部長であったバームス氏が掲げた2025年の歯科保健に関する将来予測<sup>1)</sup>を2050年版にアップデートするだけでなく、さらにはその将来予測に向けた戦略としての研究課題を様々な分野・立場の歯科医療関係者の意見や考えを集約し、立案することを目的に行われた。本稿はその内容をまとめ、報告するものである。

#### 【著者連絡先】

〒812-8582 福岡県福岡市東区馬出3-1-1  
九州大学大学院歯学研究院口腔保健推進学講座  
口腔予防医学分野  
竹内研時  
TEL：092-642-6353 FAX：092-642-6354  
E-mail：ktakeuchi@dent.kyushu-u.ac.jp

#### ワークショップの手順

ワークショップは表1に示す進行で実施された。まずはモデレーターがグループ討論の手順を説明し、その後参加者は事前に決められたAからFの6グループに分かれ、グループ討論を開始した。

各グループは事前に設定された2050年の将来予測に対する研究課題を提示し、さらにグループ毎に自由に2050年の将来予測を立て、それに対する研究課題もまた提示した。グループ討論の後、各グループの代表者が討論内容を全体に発表し、その報告を受けた上で全体討論を行い、総意を図ることを目指した。ワークショップ参加者の業種・職種は、開業医を含めた臨床の歯科医師や歯科衛生士、行政の関係者、大学の教職員、歯科関連メーカーの社員など多岐に渡った。

### 2050年の将来予測と必要な研究課題

グループ討論を始めるにあたり、事前に設定された2050年の将来予測は、(1) 歯科医院の在り方の変化、(2) 歯学部の変化、の2つで

あった。(1)は、う蝕と歯周病の2大歯科疾患を中心とした治療中心の歯科医院はなくなり、歯の喪失防止および機能回復のための高度な治療・診断技術を有する医療機関と、口腔と全身の健康との関連を踏まえ健康科学を基盤とした保健医療機関の2つのタイプの歯科医院に分化していく、という予測であった。(2)は、歯学部の形態は、専門に関わる幅広い教育を受けるための総合的健康科学教育・健康情報分野へと変わり、社会保障制度におけるセルフケア・保健事業推進のための医育機関の柱のひとつとなる、という予測であった。上記2つの将来予測に加え、各グループは独自の将来予測を立て、さらに必要な研究課題をグループ内で討論した。AからFの6グループそれぞれの討論内容を表2-1~6に示す。

表1 ワークショップの進行

1. 手順説明(5分程度)	モデレーターよりグループ討論の手順を説明。
2. グループ討論(30~40分程度)	下記(1)、(2)の2050年の将来予測に対する研究課題をグループ毎に提示。さらに、各グループが自由な将来予測を立て、それに対する研究課題を提示。 (1) 歯科医院の在り方の変化 <ul style="list-style-type: none"> <li>・う蝕と歯周疾患の2大歯科疾患を中心とした治療中心の歯科医院はなくなる。</li> <li>・歯の喪失防止および機能回復のための高度な治療や診断技術を有する医療機関と、口腔と全身の健康との関連を踏まえ健康科学を基盤とした保健医療機関の二つのタイプの歯科医院に分科していく。</li> </ul> (2) 歯学部の在り方の変化 <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門に関わる幅広い教育を受けるための総合的健康科学教育・健康情報分野となる。</li> <li>・社会保障制度におけるセルフケア・保健事業推進のための医育機関の柱のひとつとなる。</li> </ul>
3. 発表(20分程度)	各グループの代表が討論内容を発表。
4. 総括(10分程度)	モデレーターの司会で全体討論を行い、総意を図る。

表2-1 Aグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化 <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門領域の細分化</li> <li>・保険外診療の増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口腔と全身の関連(大規模無作為化比較試験)</li> <li>・かかりつけ歯科医師と死亡の関連(無作為化比較試験)</li> <li>・歯科医院継承の実態</li> <li>・専門医または総合診療医が担当する領域の検討</li> <li>・医療情報(医科も含めて)の共有方法の検討</li> </ul>
(2) 歯学部の在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の歯科教育現場の反応性・柔軟性の検討</li> <li>・生活習慣の歯科医師、疾患の歯科医師の共存の可能性を探る</li> <li>・医科歯科一元論を行う上での選択肢を探る</li> <li>・歯学部というシステムをすべて変えることの展望</li> </ul>
(3) 歯科の一般化が進む <ul style="list-style-type: none"> <li>・歯科予防は歯科医師のみで行うものではなくなる</li> <li>・行政も同様の変化が起こる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統計情報(医科と歯科が統合)の収集の仕組みの変化</li> </ul>
(4) 健康の充実による健康への関心の低下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実態調査及び意識調査の継続的実施</li> <li>・国民の健康感の変化の調査</li> </ul>

表2-2 Bグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・需要と供給の研究(①今ある歯科職種以外の職種の検討、②歯科医院の治療形態や機能の把握)</li> <li>・保健指導や健康増進のあり方</li> <li>・予防医療のマンパワー不足や定期受診のあり方</li> <li>・待っている医療ではなく地域包括ケアなど連携・共有のシステム構築</li> <li>・機能分化したグループ経営</li> </ul>
(2) 歯学部在り方の変化 ・既存教育は縮小、新たな教育が拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他学部と共同した「食」教育のあり方</li> <li>・認知症患者の食べる機能(口腔と脳機能)</li> <li>・行動変容ができる保健指導の教育のあり方</li> <li>・歯科医師国家試験出題基準を変えることの影響</li> </ul>
(3) 歯科医療サービスの在り方の変化 ・超高齢社会版歯科医療・サービスへの変更 ・疾病型の医療提供ではなく健康増進型の医療への変換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・提供できる保健指導のあり方</li> <li>・認知症患者への対応</li> </ul>

表2-3 Cグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化 ・健康概念を普及してゆく歯科医院 ・口腔保健法を実現する歯科医院 ・リスク管理ができる歯科医院 ・健康測定ができる歯科医院	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予防、健康管理を中心とした総合診療医の養成</li> <li>・世界基準となるような国民皆保険制度の完成</li> </ul>
(2) 歯学部在り方の変化 ・臨床実習の充実 ・臓器別医療からの脱却 ・歯学部のヘルスプロモーション教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヘルスプロモーションで経営を成り立たせる体制のモデル作り</li> </ul>

表2-4 Dグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レセプト情報・特定健診等情報データベースをさらに活用した口腔と全身の健康の関連</li> <li>・健康管理手法として、唾液等を用いたリスクの診断</li> </ul>
(2) 歯学部在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・批判的吟味の概念を学部教育に導入</li> <li>・他職種連携の実践の場を設定</li> </ul>
(3) さらなる高齢化における歯科の役割 ・現在の歯科医療職だけでなく、ボランティアなどの地域住民を巻き込んだでの歯科医療・保健体制の確立 ・歯科衛生士が中心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域包括ケアの機能・状況について</li> <li>・全身の健康との兼ね合いで、歯科衛生士の役割を検証</li> </ul>

表2-5 Eグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トリアージの判断基準(高次医療機関との連携の円滑化)</li> <li>・レガシーな治療に対する知識総括</li> <li>・歯科治療の長期的な予後調査</li> <li>・健康のために重要な口腔の明確化と、そのために必要な要素</li> <li>・需要の把握または予測</li> <li>・歯科専門職の役割の明確化とニーズの把握</li> </ul>
(2) 歯学部在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションスキルの適切化・確立</li> <li>・歯学部でプライマリーケア教育をする意味の追求</li> <li>・IoTを用いたセルフケア支援</li> <li>・歯科知識が不足している分野の把握</li> <li>・今までの歯科的な視点をもとに残し、伝えて行くか</li> </ul>
(3) Co-dental staffの在り方の変化 ・歯科専門職のニーズは大きく変遷し、介護やスポーツなどの様々な分野で必要とされる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来の歯科専門職の領域を越えた新たなニーズの適切な把握</li> <li>・他職種との適切な役割分担</li> </ul>
(4) 病院歯科の在り方の変化 ・口腔外科、一般歯科、口腔内科(口腔ケア)の3つにさらに明確に機能分化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レセプト分析による医療費全体へ与える歯科の効果の検証</li> </ul>

表2-6 Fグループの討論内容

将来予測	研究課題
(1) 歯科医院の在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高度な治療や診断技術を有する医療機関と、口腔と全身の健康との関連を踏まえ健康科学を基盤とした保健医療機関の二つのタイプの歯科医院に本当に分化していくのか</li> <li>・機能回復のゴールとは、8020が目標で良いのか</li> <li>・メンテナンスの効果とそのコストパフォーマンスとは</li> <li>・行動変容を起こさせる研究</li> </ul>
(2) 歯学部在り方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他職種の教員が必要か</li> <li>・他分野の全身の教育がより重要か(CBTを医療系で共通化するべきか)</li> <li>・他分野との共通言語の作成</li> </ul>
(3) 口腔の健康を義務教育へ ・健康教育が保健体育の授業で増加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような教育が重要か</li> <li>・教育の効果の検証</li> </ul>
(4) 口腔の健康格差の拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公共サービスが必要か</li> <li>・いかに下流をヘルスケアに引っ張っていくか</li> </ul>

### 考察

本ワークショップでは、事前に用意された2つの将来予測に対し様々な研究課題が提案されたことに加え、グループ毎に様々な将来予測とそれに対する研究課題も提案された。まず、各グループに共通であった(1) 歯科医院の在り方の変化、という将来予測に対し、いくつかのグループの研究課題に共通して盛り込まれたキーワードに「口腔と全身」、「総合診療医」、「連携」といったものが挙げられる。これらは全て、歯科医院に求められる役割が従来の歯科治療・予防から広範化し、口腔の健康と関連すると言われる糖尿病や認知症などの疾患<sup>2)</sup>の状態を把握し、全身の健康状態を診ることが必要になることを示唆している。同様に、いくつかのグループに共通した「需要」というキーワードからは、今後の歯科医院の経営の在り方を考える上で「需要」の把握とそれに合わせた供給体制の確保が必要であることは当然として、供給側である歯科医療の新たな診療・予防形態がニーズを具体化した「需要」の形にまで誘導できるかについても研究が必要であることが窺える。

次に、(2) 歯学部在り方の変化、という将来予測に対しては、先ほどの(1) 歯科医院の在り方の変化、にも増して多様な研究課題が挙げられた。この理由としては、学部教育と実際の臨床現場に乖離があることを、参加者の多くがそれぞれの置かれた立場で問題と認識している可能性が考えられる。すでに現在、疾病型の医療提供だけで

は対応できなくなってきた臨床現場に対し、学部教育は対処できるだけの知識や実践の場を提供できているとは言えない。多様な研究課題の中、唯一共通したキーワードの「他職種連携」は、特に高齢者の医療・介護の現場で必要性が訴えられている現状の喫緊の課題である。これは、先ほどの(1) 歯科医院の在り方の変化、として口腔の健康だけではなく全身の健康まで診ることができるようになるという将来予測に対応したものと考えられる。これは、学部での教育の中に、将来、地域の介護施設や病院、さらには高次医療機関との連携まで想定したより実践的な教育が必要となることを示唆している。以上より、歯科医学教育体系の再編は今後の歯科医院の在り方の変化に対応する上でも、最重要の課題と言えるかもしれない。

最後に、グループ毎に提案された将来予測は、歯科の概念そのものに関わるものから歯科医療サービスの形態に関わるものまで多岐に渡り、その研究課題もまたグループによって様々であった。いくつか例を取り上げると、「歯科の一般化が進む」や「さらなる高齢化における歯科の役割」、「Co-dental staffの在り方の変化」といった将来予測は、いずれも歯科という概念自体の変化を暗示したものであった。これは、歯科医師・歯科衛生士といった従来の歯科専門職だけではなく、様々な職種が歯科に参入することと、歯科専門職がその専門性を従来の歯科の領域を越えた新たな分野

で発揮していくことを同時に内包するものである。また、「歯科医療サービスの在り方の変化」や「病院歯科の在り方の変化」は、歯科医療の提供が高齢化へのさらなる対応が求められることを、健康増進型医療や口腔内科といった具体的なキーワードを挙げて説明している。さらに、健康日本21（第2次）の中でも触れられている「健康格差」についても、その拡大の懸念から公共サービスやヘルスケアの重要性と合わせて取り上げるグループが存在した。このように様々な将来予測が立てられたことは、参加者の業種や立場の違いによって様々な興味や問題意識が生まれたことが原因と考えられる。

#### まとめ

本ワークショップでは、参加者が6つのグループに分かれ、各グループで話し合われた2050年の将来予測とそれに対する研究課題が全体討論の場で提示された。多様な業種・職種を交えた議論の結果、現代版バームス予測と表現するだけの総意を図るには、今後さらなる議論の積み重ねが必要と理解に至った。今回の議論を骨子に、各自がそれぞれの分野で課題とした研究課題に取り組むことで、将来予測がより確実なものに成形されていくことが期待される。

#### 謝辞

ワークショップ参加者の皆様に感謝申し上げます。参加者は下記の各氏です。

氏名	所属
浅野 大樹	医歯薬出版
新居 直実	東北大学大学院
安藤 雄一	国立保健医療科学院
五十嵐彩夏	東北大学大学院
石濱 信之	三重県津保健所保健衛生室地域保健課
伊藤 博夫	徳島大学
上野 尚雄	国立がん研究センター
大鳥 克郎	日本歯科大学
大山 篤	神戸製鋼
岡本 悦司	福知山公立大学
片岡 竜太	昭和大学
金井 優太	ヒョーロンパブリッシャーズ

蒲池世史郎	ネパール歯科医療協会の
上川 克己	広島県歯科医師会
神原 正樹	大阪歯科大学
木村 明	インターアクション株式会社
呉 沢哲	大阪府開業
黒川亜希子	ライオン歯科衛生研究所
佐藤 遊洋	東北大学
嶋崎 義浩	愛知学院大学
白田千代子	東京医科歯科大学
仙波伊知郎	鹿児島大学
高世 尚子	サンスター
竹内 研時	九州大学
多田 裕樹	クインテッセンス出版
多田紗弥夏	新潟大学予防歯科学大学院生
田中 道雄	神奈川歯科大学口腔学講座大学院生
種村 崇	東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野院生
田村 公平	東京都西多摩保健所
恒石美登里	日本歯科総合研究機構
内藤 広喜	クインテッセンス出版
内藤真理子	名古屋大学
野口 有紀	静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科
野村 義明	鶴見大学
花田 信弘	鶴見大学
深井 穂博	深井保健科学研究所
福井 聡嗣	医歯薬出版
増田美恵子	静岡県歯科衛生士学校
松田 俊介	クインテッセンス出版
水谷惟紗久	日本歯科新聞
溝口 玲子	静岡県歯科衛生士学校
宮崎 秀夫	新潟大学
矢野 裕子	ネパール歯科医療協会の
山口 徹朗	デンタルダイヤモンド
山科 透	広島県歯科医師会
山本 龍生	神奈川歯科大学
吉野 浩一	横浜銀行
脇田 真知	サンスター
渡辺 晃子	厚木保健福祉事務所

#### 文献

- 1) 日本歯科医師会. WHOのバームス口腔衛生部長官科界の大変革を予測, 日歯広報 1990年4月25日, No875
- 2) 日本歯科医師会. 健康長寿社会に寄与する歯科医療・口腔保健のエビデンス2015, 日本歯科医師会, 東京, 2015.

## Oral health research towards 2050

– A summary of a workshop at the 15<sup>th</sup> colloquium of Fukai Institute of Health Science –

Kenji Takeuchi<sup>1)</sup>, Kakuhiro Fukai<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Section of Preventive and Public Health Dentistry, Division of Oral Health, Growth and Development, Faculty of Dental Science, Kyushu University

<sup>2)</sup> Fukai Institute of health Science

Key Words : Dental clinic, faculty of dentistry, demand, aging, partnerships with other professionals

It is important for predicting dental care and oral hygiene by 2050 to provide scientific evidences by drafting research questions based on the long-term vision. The authors organized a workshop on the topic of “Research questions towards 2050” at the 15th Fukai Institute of Health Science Colloquium (August 20, 2016, Tokyo International Forum). Participants of various backgrounds took active parts in discussions about the following themes: 1) Future existence of the dental clinic, 2) Future existence of the faculty of dentistry. The work shop resulted in providing many research questions by 2050. Based on the results, more discussion is necessary for proposing a modern version of the Barmes’s prediction.

Health Science and Health Care 16 (2) : 85 – 90, 2016